

ふるさと 再発見 (20)

赤羽根サーフィンの歴史

(赤羽根町)

夏と言えば、サーフィン！この渥美半島の表浜海岸一帯、中でも赤羽根は日本でも屈指のサーフィンスポットです。今回は赤羽根サーフィンの歴史について紹介します。

1960年代初め、神奈川県湘南で外国人がサーフィンをしているのを見た若者が、まねて始めたのが日本のサーフィンの始まりと言われています。

当時、赤羽根ではまだサーフィンをする人だけでなく、子どもたちは板子乗りと称して、板きれで波に乗って遊んでいたそうです。

1965年頃になると、名古屋にサーフショップが出来始め、その人たちが赤羽根でサーフィンをするようになったのが、赤羽根でのサーフィンの始まりです。しかし、赤羽根の人にとっては、まだ馴染みがなく、弥八島の上に植物園があった頃、レンタルのサーフボードがあり、それを見てサー



サーフボードの今昔

フィンを認識したそうです。

1970年に入り、日本中でアメリカ西海岸ブームがおこり、同時にサーフィンも大ブームになり、それは赤羽根でも例外ではありませんでした。

当時、赤羽根の住民で初めてサー



フィンをした鈴木さんによると、それまで、現ロングビーチでのみサーフィンをしていたのが、サーフィン人口の増加に伴い赤羽根港の西側や、東(現口ポイント)でもサーフィンをするようになったとの事です。

ブームの影で、サーファーと住民とのトラブルも増加、旧赤羽根町ではサーフィン禁止条例まで検討するほどでした。しかしサーファーとの共存を選択した当時の赤羽根町はトイレ、駐車場・道路整備などを行い、現在では日本でも1~2を競うサーフポイントに成長しました。一方でサーファーマナーの向上やビーチクリーンなどフィールドの保全に取り組み始めたのもこの頃からです。

そして現在では、サーフィン世界大会が毎年開催され、大会中は全国から約4万人の人々が訪れています。昨年は田原市出身のプロサーファーもこの大会に出場しています。

また、田原市サーフィン協会では毎年子ども向けにサーフィン教室を開催するなど普及に努めています。さらにベテランサーファーを中心に海岸での防犯や海難事故防止のボランティア活動を実施するなど、地元との共生に努力しています。

サーフィンは自然相手、そのためリスクも非常に高いスポーツです。しかし、ルールマナーを守れば自然と一体となれるすばらしいスポーツです。

この夏、ぜひ体験してみませんか。
(取材協力：赤羽根在住鈴木さん、Mic Growing Surf Pro Shop、田原市サーフィン協会、田原市役所赤羽根支所)

議会議会 春夏秋冬

「ローターリーの友」6月号によると、日本人は一年間に1900万トンの食糧を捨てているそうです。途上国で食糧危機に陥っている国が数多くあります。先進国が食糧支援をしています。その量が一年間に1000万トン。日本は食べ物が増えているので、どうにか？そうではありません。先進国の中では食糧自給率は最低で途上国を入れても低い方です。自給率は39%（カロリーベース）。地球の温暖化が進んで気温が上昇し米ができなくなると自給率は12%になってしまうそうです。

話は変わり、日本には平成18年4月の時点でおよそ2400の市町村があるそうです。一年間に農業を始める人が約5200人位です。一つの町村に年平均で2・2人ぐらいの人数しかいません。この実態を皆さんしつかり考えてください。

現在、田原市の専業農家はおよそ2000戸ですが、確実に減少しています。今後、ますます日本の食糧生産は減少のペースが加速されると思います。どうなるのか日本の食糧 日本の農業。

(T・S)